

鳥をとるやなぎ

宮沢賢治

青空文庫

「煙山けむやまにエレツキのやなぎの木があるよ。」

藤原慶次郎けいじろうがだしぬけに私に云いいました。私たちがみんな教室に入いって、机すわに座り、先生はまだ教員室に寄よっている間までした。尋常じんじょう四年の二学期のはじめ頃ごろだったと思おもいます。

「エレキの楊やなぎの木？」と私が尋ね返たずそうとしましたとき、慶次郎はあんまり短みく短みく書かけなくななった鉛筆えんぴつを、一番前の源吉に投なげつけました。源吉はうしろを向むいて、みんなの顔をくらべていましたが、すばやく机すわに顔を伏ふせて、両手で頭あたまをかかえてかくれていた慶次郎を見つけると、まるで怒おこり出して

「何なにするんだい。慶次郎。何なにするんだい。」なんて高たかく叫さけびました。みんなもこつちを見ただので私も大へんきまりが悪わるかったのです。その時先生が、鞭むちや白墨はくぼくや地図ちずを持もつて入いって来きられたもんですから、みんなは俄にわかかにしずかになつて立ち、源吉ももう一いっぺん遍べんこつちをふりむいてから、席せきのそばに立ちました。慶次郎も顔をまっ赤あかにしてくつくつ笑わらいながら立ちました。そして礼れいがすんで授業じゆぎょうがはじまりました。私は授業中もそのやなぎのこことを早く慶次郎に尋ねたかつたのですけれどもどう云いうわけかあんまり聞ききたかつたため

に云い出し兼ねていました。それに慶次郎がもう忘れたような顔をしていたので。

けれどもその時間が終り、礼も済んでみんな並んで廊下へ出る途中、私は慶次郎にたずねました。

「さつきの楊の木ね、煙山の楊の木ね、どうしたって云うの。」

慶次郎はいつものように、白い歯を出して笑いながら答えました。

「今朝権兵衛茶屋のところで、馬をひいた人がそう云っていたよ。煙山の野原に鳥を吸い込む楊の木があるって。エレキらしいって云ったよ。」

「行こうじゃないか。見に行こうじゃないか。どんなだろう。きっと古い木だね。」私は

冬によくやる木片を焼いて髪の毛に擦るとごみを吸い取することを考えながら云いました。

「行こう。今日僕うちへ一遍帰つてから、さそいに行くから。」

「待つてるから。」私たちは約束しました。そしてその通りその日のひるすぎ、私たちはいっしょに出かけたのでした。

権兵衛茶屋のわきから蕎麦ばたけや松林を通つて、煙山の野原に出ましたら、向うには毒ヶ森や南晶山が、たいへん暗くそびえ、その上を雲がきらきら光つて、
々々には竜の形の黒雲もあつて、どんどん北の方へ飛び、野原はひっそりとして人も馬も

居ず、草には穂が一杯に出ていました。

「どっちへ行こう。」

「さきに川原へ行つて見ようよ。あそこには古い木がたくさんあるから。」

私たちはだんだん河の方へ行きました。

けむりのような草の穂をふんで、一生けん命急いだのです。

向うに毒ヶ森から出て来る小さな川の白い石原が見えて来ました。その川は、ふだんは水も大へんに少くて、大抵の処なら着物を脱がなくても渉れる位だったのですが、一ぺん水が出ると、まるで川幅が二十間位にもなつて恐ろしく濁り、ごうごう流れるのです。ですから川原は割合に広く、まっ白な砂利でできていて、処々にはひめははこぐさやすぎなやねむなどが生えていたのですが、少し上流の方には、川に添って大きな楊の木が、何本も何本もならんで立っていました。私たちはその上流の方の青い楊の木立を見ました。

「どの木だろうね。」

「さあ、どの木だか知らないよ。まあ行つて見ようや。鳥が吸い込まれるって云うんだから、見たらわかるだろう。」

私たちはそつちへ歩いて行きました。

そこらの草は、みじかかったのですが粗あらくて剛こわくて度々たびたび足を切りそうでしたので、私たちは河原に下りて石をわたつて行きました。

それから川がまがつているので水に入りました。空が曇くもっていましたので水は灰いろに見えそれに大へんつめたかったので、私たちはあまのじやくのような何とも云えない寂さびしい心持がしました。

だんだん溯のぼつて、とうとうさつき青いくしやくしやの球たまのように見えたいちばんはずれの楊の木の前まで来ましたがやっぱり野原はひっそりして音もなかったのです。

「この木だろうか。さっぱり鳥が居ないからわからないねえ。」

私が云いましたら慶次郎も心配そうに向うの方からずうつとならんでいる木を一本ずつ見ていました。

野原には風がなかったのですが空には吹ふいていたと見えてきらきら光る灰いろの雲が、所々ねずみ鼠いろの縞しまになつてどんどん北の方へ流れていました。

「鳥が来なくちやわからないねえ。」慶次郎が又云いました。

「うん、鷹たかか何か来るといいねえ。木の上を飛んでいて、きつとよろよろしてしまおうと僕

はおもうよ。」

「きまつてらあ、殺生石せつしょうせきだつてそうだそうだよ。」

「きつと鳥はくちばしを引かれるんだね。」

「そうさ。くちばしならきつと磁石にかかるよ。」

「楊の木に磁石があるのだろうか。」

「磁石だ。」

風がどうつとやつて来ました。するといままで青かった楊の木が、俄にわかにきつと灰いろになり、その葉はみんなブリキでできているように変つてしまいました。そしてちらちらちらちらゆれたのです。

私たちは思わず一いっしょ緒に叫んだのでした。

「ああ磁石だ。やつぱり磁石だ。」

ところがどうしたわけか、鳥は一向来ませんでした。

慶次郎は、いかにもその鷹やなにかが楊の木に嘴くちばしを引っぱられて、逆さかになつて木の中に吸こい込まれるのを見たいらしく、上の方ばかり向いて歩きましたし、私もやはりその通りでしたから、二人はたびたび石につまづいて、倒たおれそうになつたり又いきなりバチャンと

川原の中のたまり水にふみ込んだりもしました。

「どうして今日は斯う鳥がいらないだろう。」

慶次郎は、少し恨めしいように空を見まわしました。

「みんなその楊の木に吸われてしまったのだろうか。」私はまさかそうでもないとは思いますが斯う言いました。

「だって野原中の鳥が、みんな吸いこまれるってそんなことはないだろう。」慶次郎がまじめに云いましたので私は笑いました。

その時、こつち岸の河原は尽きてしまつて、もつと川を溯るには、どうしてもまた水を涉らなければならぬようになりました。

そして水に足を入れたとき、私たちは思わずばあつと棒立ちになつてしまいました。向うの楊の木から、まるでまるで百足ばかりの百舌が、一ぺんに飛び立って、一かたまりになつて北の方へかけて行くのです。その塊は波のようにゆれて、ぎらぎらする雲の下を行きました。俄かに向うの五本目の大きな楊の上まで行くと、本当に磁石に吸い込まれたように、一ぺんにその中に落ち込みました。みんなその梢の中に入つてしばらくががあがあが鳴いていましたが、まもなくしいんとなつてしまいました。

私は実際変な気がしてしまいました。なぜならもすがかたまつて飛んで行って、木におりることは、決してめずらしいことではなかったのですが、今日のはあんまり俄かに落ちたし事によると、あの馬を引いた人のはなしの通り木に吸い込まれたのかも知れないといふのですから、まったくなんだか本当のような偽うそのような変な気がして仕方なかったのです。

慶次郎もそうなようでした。水の中に立ったまま、しばらく考えていましたが、気がついたように云いました。

「今のは吸い込まれたのだろうか。」

「そうかも知れないよ。」どうだかと思いつながら私は生返なまへんじ事をしました。

「吸い込まれたのだねえ、だってあんまり急に落ちた。」慶次郎も無理にそうきめたいと云う風でした。

「もう死んだのかも知れないよ。」私は又どうもそうでもないと思いつながら云いました。

「死んだのだねえ、死ぬ前苦しがつて泣いた。」慶次郎が又斯こうは云いましたが、やっぱり変な顔をしていました。

「石を投げて見ようか。石を投げて遁にげなかつたら死んだんだ。」

「投げよう。」慶次郎はもう水の中から円い平たい石を一つ拾っていました。そして力一ぱいさっきの楊の木に投げつけました。石はその半分も行きませんでした。百舌はにわかにながと鳴って、まるで音譜おんぶをばらまきにしたように飛びあがりました。

そしてすぐとなりの少し低い楊の木の中にはいりました。すっかりさっきの通りだったのです。

「生きていたねえ、だまってみんな僕たちのこと見てたんだよ。」慶次郎はがっかりしたようでした。

「そうだよ。石が届かないうちに、みんな飛んだもねえ。」私も答えながらたいへん寂しい気がして向うの河原に向って又水を渉りはじめました。

私たちは河原にのぼって、砥石とishiになるような柔らかな白い円い石を見ました。ほんとうはそれはあんまり柔らかで砥石にはならなかったかも知れませんが、とにかく私たちはそう云う石をよく砥石と云って外ほかの硬かたい大きな石に水で擦こすって四角にしたものです。慶次郎はそれを両手で起して、川へバチャンと投げました。石はすぐ沈しずんで水の底へ行き、ことにまっ白に少し青白く見えました。私はそれが又何とも云えず悲しいように思ったのです。その時でした。俄かにそらがやかましくなり、見上げましたら一むれの百舌が私たちの

頭の上を過ぎていました。百舌はたしかに私たちを恐れたらしく、一段高く飛びあがって、それから楊を二本越えて、向うの三本目の楊を通るとき、又何かに引っぱられたように、いきなりその中に入ってしまった。

けれどももう、私も慶次郎も、その木の中でもずが死ぬとは思いませんでした。慶次郎は本気に石を投げたのですが、百舌は一ぺんにとびあがりました。向うの低い楊の木からも、やかましく鳴いてさつきの鳥がとび立ちました。私はほんとうにさびしくなってもう帰ろうと思いました。

「どこかに、けれど、ほんとうの木はあるよ。」

慶次郎は云いました。私もどこかにあるとは思いましたが、この川には決してないと思つたのです。

「外ほかへ行って見よう。野原のうち、どこか外とこの処とこだよ。外へ行って見よう。」私は云いました。慶次郎もだまつてあるき出し、私たちは河原から岸の草はらの方へ出ました。

それから毒ヶ森ふもとの麓ふもとの黒い松まつばやし林の方へ向いて、きつねのしっぽのような茶いろの草の穂をふんで歩いて行きました。

そしたら慶次郎が、ちよつとうしろを振り向いて叫びました。

「あ、ごらん、あんなに居たよ。」

私もふり向きしました。もすが、まるで千疋ばかりも飛びたつて、野原をずうつと向うへかけて行くように見えました。今度も又、俄かに一本の楊の木に落ちてしまいました。けれども私たちはもう何も云いませんでした。鳥を吸い込む楊の木があるとも思えず、又鳥の落ち込みようがあんまりひどいので、そんなことが全くないとも思えず、ほんとうに気持ちが悪くなったのでした。

「もうだめだよ。帰ろう。」私は云いました。そして慶次郎もだまってくるつと戻つたのでした。

けれどもいまでもまだ私には、楊の木に鳥を吸い込む力があると思えて仕方ないのです。

青空文庫情報

底本：「新編 風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳥をとるやなぎ

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>